

小学生 最優秀賞

入院生活で得たこと

大阪市立高殿小学校

六年

村田

亜聡

ぼくは、二年生の時にいじめられてPTSDになり、それ以来学校に行けなくなりました。周りに配りよしてもらったり、支援してもらったり、理解してもらわなければ、ふうに生活が出来なくなるなんて思ってもみないことでした。いつ、だれが障がいを持って、おかしくないという事を知りました。

学校に行けなくなった三年目の日、ぼくは夢か現実かわからなくなって、気づいたら家の二階のベランダから飛び降りて救急車で運ばれました。いじめられた経験から、子供が怖いぼくは、入院生活を上手くやっけていけるか心配だったけど、入院先で知り合った友達は、みんな違う理由で入院しているのに、自然と仲良くなつて楽しい毎日を過ごす事ができました。みんなPTSDの事は知らないし

ぼくも友達の病気の事は詳しく知らないし、友達の中にはもともと障がいを持って生まれ、てきた子もいれば事故でそうなってしまった子もいました。ぼくたちにとっては、たまたま、友達に障がいがあったというだけで、みんながんばっているという風にしか思いま
せんでした。みんな、思うようにいかない事もあるのです、違う理由でイライラすることもあつたけど、なんだかその気持ちが自然と理解できて、そつとしてあげようというふんいきになりました。友達が困っている時は、心配して、一緒に楽しく過ごせるように力になれる事はなんでもしました。障がいについて理解するより、その子の気持ちを理解しようと自然にみんな動いていました。ぼくも、こうふんしすぎたり、悪夢を見て毎晩ベットから落ちたりするので、同室の友達は、その度、ナーズコールを押ししてくれました。あまりにも毎日続くので、友達は、ぼくのお母さんから理由を聞いて、お母さんがいない時には、

看護師さんに理由を伝えてくれたりもしました。いじめられた時の話も自然と出来たし、苦しい事も話したりもしました。人がつらい気持ちを話している時は、だれもわかったふりはしなかったし、理解しようと耳を傾けていました。お母さんから後で聞いた話ですが、ぼくを集中治療室から小児科病棟にうつす時、いじめられてPTSDになって、学校に長い間行けていない事やぼくの抱えている問題を看護師さん達は理解し、足の骨折の治りようだけでなく、この入院生活がぼくにとって成り体験になるように、どの子と同室にすべきか等、いろいろ考えてくれたそうで、おかげで、ぼくは、自分の事を受け入れてくれる子がいる事を知り、自信ができました。

ぼくは、学校に復学する事も病気を治す事もあきらめていません。ぼくが学校に行くという事は、配りよや支えんが必要なので、周りにぼくの事を理解してもらわないといけません。ぼくがくじけずに頑張ろうと思います。入

院中はその子だけを見ていたので、その子の
病気や障がいなんて全く気にもならなかった
けど、ぼくも友達も退院すれば、周囲に配り
よをしてもらって、支援をしてもらいながら
生活をしていく事になります。障がいや病気
ばかりを見て、心ない事を言う人もいるかも
しれません。ぼくだけでなく、友達もみんな
社会の中で、自分の障がいや病気を受け入れ
て、頑張っているんだと思うとぼくも負け
ていられないと思っっています。学校でも、入
院中と同じように、病気や障がいは関係なく
まず、その子自身を好きになつて、大事に想
つて、一緒の時間をどうすれば楽しく過ごせ
るのかを考えて、どうにもならない時は、周
りの大人に頼つて、安心して過ごせたらいい
のになと思いました。障がいや病気なんて関
係なく、共に生きていける世の中になるため
に、ぼくもがんばっていきたいと思いました。

。